

# メルメ・カシヨンのアイヌ研究

富田 仁

幕末の外交史上に特異な足跡を刻んでいるフランス人宣教師、メルメ・カシヨン Mermet Caehon (一八二八—一八七二?) は箱館滞在中(一八五九—一八六三)にアイヌの集落を探訪し、それを『アイヌ。起原、言語、風俗、宗教』*Les Aïnos, origine, langue, moeurs, religions* (一八六三)としてパリで刊行してゐる。

この書物については拙著『佛蘭西學のあけぼの——佛學事始とその背景——』(カルチャー出版社)で少しばかり紹介済みであるが、私はその中でつぎのようにカシヨンのアイヌ研究が日本ではまったく知られていないように書いた。

カシヨンのこの書物については、おそらくは従来まったく紹介されることになかったようである。最近のアイヌ研究書、たとえば植原和郎ほか編『アイヌ。シンボジウム その起源と文化形成』(一九七二年 北海道大学図書刊行会)の巻末の研究書誌にも記載されていないように、この書物の存在そのものがほとんどまったく知られていない。カシヨンゆかりの地の函館市立図書館や国立国会図書館などの蔵書目録にもない。二十ページの小冊子だが、カシヨンが

アイヌ聚落を探訪して、実際にアイヌの生活を調べて書いたもので、アイヌの起原、その身体的特徴、信仰、家屋、食物、婦徳、言語、葬式、漁など多岐にわたって紹介している。カシヨンは多角的にアイヌの実態を記しているが、その筆はすこぶる具体的に詳細に叙述している(以下略)。

カシヨンの書物が私の紹介より前に果してほんとうに日本では知られていなかったのかどうか、という疑問を抱いて調査した熱心な学生がいて、先頃きわめて興味深い報告書を作成し、昭和十七年の時点で『アイヌ。起原、言語、風俗、宗教』の書名が式場隆三郎編纂の『アイヌ書誌』にみられることを教えてくれた。その文芸科学生・望月リカは同時に箱館駐在のイギリス領事ホチソン C. Pemberton Hodgson のアイヌ探訪にカシヨンが同行したことをも指摘している。

本稿は望月リカの報告書を契機として執筆するものであることをあらかじめ断っておく。

式場隆三郎は雑誌『工藝』百十号(昭和十七年三月)に寄稿した「アイヌ書誌」で、フランスの民俗学者ジョルジュ・モンタンドン Georges Montandon の「アイヌ文献志」中にカシヨンの書物をとりあげているのである。

ジョルジュ・モンタンドンは大正八年にアイヌ研究の目的で北海道に渡り、胆振地方のホロベツ、シラオイ、シャダイの三集落、高の沙流地方のニナ、ピラトリ、ニプタニの三集落、合計六集落で調査を行なった。人類学的見地から男女それぞれ五十五名を調査し、また民族学的見地から衣食住の生活、狩猟と漁撈の生活、さらに宗教など全般にわたり詳細な調査を試み、これらの調査をほかの北方民族のそれと比較検討して、のちに人類学的研究は『アイヌの郷土を訪れ』『Au pays des Aïnou, 1927』民族学的研究は『アイヌの文化』『La Civilisation Aïnou et les Cultures Arctiques 1937』として公刊した。

とくに後者の著作は、式場によれば「あらゆる方面からアイヌを調べた近來の好著である。體質、生活、風俗、土俗、宗教、經濟、藝術に及び、外人でこれだけ詳細にしらべたものはない。挿畫も非常にいい。第二部はアイヌに關聯したギリヤーク、オロッコ、エスキモーその他北方の諸民族の研究である。文献もよく調査がゆきとどき、諸外國における近時のアイヌと北方文化の研究の傾向を知るに便利である」と、きわめて高く評価されるものである。

式場はモンタンドンのアイヌ研究の著作を列挙したあと、「アイヌ文献志」に言及し、つぎのように叙述している。

この本の文献志は、考古學に關する部、アイヌに關する部、北方民族に關する部などに分けて各所に掲載してあるが、ここではアイヌのもので重要とみられるもののみを掲げることとする。モンタンドンのアイヌ文献志は、まづ例のチエンパレンの書誌に始まつてゐる。

Wenckstern (Fr. von), Bibliography of the Japanese Empire, t. 1, Leyde Brill; t. 2, Tokyo, Maruya, 1907.

La Pérouse (Jean-François de Galaup de), Voyage de La Pérouse autour du monde, rédigé par L. A. Millet-Mureau, Paris, Imprimerie de la République, 4 vol. 1797.

Mernet de Cachon, Les Aïnos. Origine, langue, mœurs, religion, Paris, Mesnel, 1863. (30P.) (以下略)

カシヨンの書物はわずかに著者名、書名、発行所、発行年、ページ数が伝えられているにすぎない。内容の紹介は皆無である。私がパリ国立図書館で閲覧した『アイノ』は二十ページであるが、モンタンドンの「アイヌ文献志」では三十ページとなっている。誤記であらう。

アイヌに關する外國人の研究としては、メルメ・カシヨン以前にはごくわずかしかみられない。蝦夷地に渡ってアイヌ民族を観察した最初のヨーロッパ人はイエズス会のイタリヤ人神父ジロラモ・デ・アンジェリス Girolamo de Angelis (1567~1623) で、一六一八年と一六一二年の二回、松前に赴いて蝦夷国報告書を書いて、第二回目の報告書は一六二五年にイタリアで出版されている。

Relatione del Regno di Iezo, Relatione di alcune cose 1625. Milano がそれである。地理的な事柄のほかにアイヌ民族の体質、容貌、服飾、武器、船、交易、宗教、妻のことなどに加えて語彙と数詞がとりあげられていて、アイヌに関するもっとも信頼できる最古の系統的な調査報告書とみられている。

同じ頃、やはり松前にポルトガルのイエズス会宣教師ディオゴ・カルヴァーリョ Diogo Carvalho (一五七八—一六二四) が訪れている。一六二〇年八月のことで、松前に交易に来てアイヌに直接会い、その見聞から蝦夷国報告書をもとめている。Copia de humaque o P.e Diego Carvalho me escreveu acerca da Missam que fez a Yezo e outras partes, 21 de outubro 1620, in: Archivum Romanum Societatis Jesu, Jap. - Sin. 34. ff. 169-172 v. がその原文である。

このあと、オランダの航海家マールテン・ゲルリッツェン・フリース Maerten Gerritsen Vries が一六四三年に北海道のアッケシ、クナシリ島北岸とサハリンのアニワ湾北岸、タライカ地方に來航し、アイヌに関する記録を残した。また、ロシア人のシユテファン・クラシヒニニコフ Stephan Krascheninikoff と、ゲオルグ・ウイヘルム・シユテラー Georg Wilhelm Steller が一七三六年と一七三八年にそれぞれカムチャッカと北千島で調査し、マルチン・シユパンヌルグ Martin Spanberg も一七三九年にクナシリ島の南部と北部を訪れ、アイヌに関する記録を書いている。

さて、フランス人も一七八七年に南サハリンに姿を現し、アイヌについての調査をしている。ジャン・フランソア・ガロー・ド・ラ・ペルーズ Jean Francois Galaup de La Perouse と称する海

洋探検家が太平洋調査の目的でフランスのブレस्त港を出帆したのは一七八五年のことである。翌々年七月十二日に現在のクシェンナイ湾に來航し、二日間滞在した。ラ・ペルーズはそこに集って来た二十一名のアイヌの男たちからさまざまなことを聞き出した。M. L. A. Millet Mureau: The Voyage of La Perouse round the world, 1798. London にラ・ペルーズの旅行が詳しく伝えられている。

一七九六年九月、イギリスの航海家ウィリアム・ロバート・ブローテン William Robert Broughton はエリモ岬から西方に向い、みずから噴火湾と命名した灣(なぞらへは有珠山、駒ヶ岳、恵山)に入り、アイヌを観察している。A voyage discovery to the north pacific Ocean, 1804. London にその記録が収められている。

十九世紀に入ると、ロシアの遣日使節レザノフを護送する任務で來日した海将であり、航海家のアダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン Adam Johann von Krusenstern が一八〇五年に宗谷地方とアニワ湾の北岸に上陸し、アイヌを観察し、「アイヌ」と初めて蝦夷人呼んだ。羽仁五郎訳『クルウゼンシュテルン日本紀行』(Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806. 1810-1813. St. Petersburg の翻訳はその記録を収めている。

なお、ドイツ人医師ゲオルグ・ハインリヒ・ラングスドルフ Georg Heinrich Langsdorff は軍医としてナデジダ艦に乗りこみ、クルーゼンシュテルンの調査探検旅行に同行したが、医学的および博物学的の見地からアイヌを考察し、一八一二年に『世界周航記』(Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807) を刊行している。彼はわずかに一度だけ「アイ

ノ」という表現で蝦夷人と呼んでいるが、あとはすべて「アイヌ」という名称を用いている。

ロシアは対日交渉が開始される時点でレザノフを長崎に来航させて通商を求めたが、拒絶されたことから、一八〇四年に報復的にサハリンのクシエンコタン、エトロフ、リシリなどの運上所を襲撃した。その折のロシア海軍士官のひとりにガヴリロ・イヴァノヴィッチ・ダヴィドフ Gavriilo Ivanovich Davidov がいる。彼は襲撃の間にアイヌに接触してその言語を研究した。死後『アイノ言語の語集』Wörter sammlung aus der Sprache der Aino's 1813. が刊行されている。

以上がカシヨンの著作以前の西洋人のアイヌ研究であるが、いずれもアイヌ民族との接触による記録を残しているという特徴がある。一方、アイヌ民族に直接コンタクトをもたなかったが、アレクサンドル・フォン・シーボルト Alexandre von Siebold によってヨーロッパにおけるアイヌ研究の端緒が開かれたことも見落してはならない。式場隆三郎はこの点をつぎのように記述している。

歐洲におけるアイヌの學術的研究は、シーボルトによつて開かれた。一八二九年（文政十二年）七月六日巴里亞細亞協會では、日本から來たシーボルトの『日本人種起原論』をクラブプロートが報告して批判した。Nouveau Journal Asiatique の一八二九年第三卷の第二の二三七頁に一八二七年十二月十五日づけのシーボルトの亞細亞協會宛の書翰があり、三八五頁に『日本人種論』の佛譯が出てゐるといふ。この號に日本最初のアイヌ語辭典『もしほ草』（上原熊次郎著）が紹介されてゐるし、オーストリーのステファン・エンド

リヘルの一八三七年刊行の『和漢錢志』の附録にもこの本のことが出てゐるといふ。なほ新村出博士によれば August Fitzmaier の Untersuchung über den Bau der Ainosprache (1851) はシーボルトのもちかへつた『もしほ草』によつたものであり、Theodor Benfey の『言語學史・附獨逸東洋文獻史』（一八六九年）第十八節にアイヌ語學についての記述があるといふ。

なほフイツマイエルにはアイヌ語をローマナイズしてアルファベチカルに編纂した Vocabularium der Aino Sprache, 1852 やアイヌ歌謡の研究 Beiträge zur Kenntniss der Aino-Poesie, 1850 がある。（以下略）

カシヨンがこれらの西洋人のアイヌ研究についてどれだけの知識をもっていたのかはわからないが、その来日以前に可能性としてはアイヌ民族に無知ではなかったことが考えられるのである。宣教師は赴任の土地に関してまったくの無知識であることは許されない。その土地の言語、風習などについて知る努力が要求されている。カシヨンの場合、琉球で日本語の学習に専念している。彼が箱館に赴任するに當つて蝦夷地と蝦夷人について相應の知識を得ようとしていたことは想像される。そのとき、前述の西洋人のアイヌ研究のいずれかをひもどいていたこともまた考えられないことではない。もっとも、カシヨンは二年間の那覇滞在でかなりの日本語の知識を取っていたので、日本語によるアイヌに関する文献類にも眼を通していたかもしれない。残念なことにこれらはすべて推定であり、詳細は不明である。

カシヨンは安政六年十一月二十五日に箱館に赴任したが、数日

間、当時フランス代理領事を兼任していたイギリス領事ホチソンの住む稱名寺に仮寓したのち、小聖堂の建築などに着手した。紙数の都合もあり、また拙著『佛蘭西學のあけぼの』にも記したので、箱館におけるカシムの活動については記述を割愛するが、箱館滞在中にカシムはアイヌの集落を探訪してゐるのである。この探訪はホチソンのオールコック公使宛書簡につきのように報告されてゐる。

On the 14th of June I left Hakodate for my first inland excursion. Since October 15th, I had been a prisoner in consequence of snow, business, or other not too agreeable occupations; but the weather was fine, my port so triste, no ship, and my wife and child were wanting a change of air.

I fortunately found M. Mermet, a French abbé and gentleman, to accompany me, and Mrs. Hodgson prevailed upon the wife of our Russian doctor, Mr. Albrecht, to join us.

(六月十四日に、私は最初の内地遊覧のために箱館を離れた。十月十五日以来、私は雪や仕事やほかのあまり楽しくない任務のために幽閉の身であつたが、天候はよく、港は大変物悲しく、船もなぐ、妻子は軼地を望んでゐた。

私は幸いにして同行するフランス人宣教師で紳士のメルメ氏をみつけたし、妻のホチソン夫人はロシア人医師アルブレヒト氏の夫人に私たちに加わるよう承諾させた。)

これは一八六〇年六月十六日の書簡の一節であるが、このとき

はアイヌの探訪はしていない。それは書簡の末尾のつぎの文面でもあきらかである。

My second party was amongst the "Ainos", with l'Abbé Mermet, and Mr. Cowan.

私のつぎの旅(はメルメ師とコーワン氏といっしょの「アイノ」探訪だつた)

ホチソンがカシムたちとアイヌ探訪に出発したのは六月二十七日のことである。これについては七月二十四日付のオールコック宛第二信に報告されている。奉行所の許可をえての騎馬旅行であることが文面にあきらかである。箱館から約二十マイルの距離にあるアイヌの集落がその探訪先であつた。入口には熊の頭の柵があり、入るには料金は不要であつたこと、男も女も子どもも土下座して迎えてくれたことなどを記したあとで、アイヌがいやしめられた日本の土人で、総数八万人の少数民族であり、女性は豊かな黒髪をたらし、唇に青色の刺青をしていること、日本語を話さないこと、魚や草木で生活していること、魚油をとるために松前や箱館の商人に一日一ペニーで雇われていることなどを驚きの眼で報告している。原文でこれを伝えることにしよう。

At the entrance to the first "Aino" village, heads of bears formed, if not a noble, a suitable barrière; but there was no "otroi" to pay. [.....]. Along the pathway, for it was only a narrow path, where one or two horses could go abreast,

these despised of Japanese cringed, men, women, and children (to my horror and disgust) before us. [.....]. The "Ainos" are, I understand, the despised aborigines of Japan! Their number does not to-day exceed 80,000. [.....] The women have a profusion of black blowing hair, combed "long, long ago;" their appearance is not the most cleanly, but they seemed so humble that we pitied them. Barring this long hair, with its untidiness, they (the ladies) have a tattooed upper and under lip, beautifully blue: it might please the poet, not man. [.....] These poor people do not speak Japanese; even my servants of Hakodate could not converse with them; [... ] They live entirely on fish and herbs. At every few miles you may meet an "Aino" settlement, — boats, nets, and all the concomitants of a fishing village.

Many are employed by Matsumai and Hakodate merchants to obtain fish for oil, and they gain one whole penny a day! but to these simple folk that is enough, perhaps.

ホチソンは蝦夷地の遊覧でアイヌ探訪にのみ眼を奪われたわけではない。この書簡の末尾で蝦夷地の豊富な森林がどの国の艦隊にも必要な木材の大きな供給源であり、これを輸出することを熱心に説き、その貿易が可能なとき、日英和親条約が真の和親条約になるにきがないと結んでいるところには注目した。

カシヨンの著『アイヌ』は一八六三年末にパリで刊行されてゐる。その末尾に「一八六三年十月二十九日、パリ」というカシヨンの記述があり、その刊行年月を示すものとなっている。この書物の大きな特色はカシヨンが直接アイヌを探訪して著述に當つてゐることである。たとへば、それは、「ある日、私はアイノのある女性にどうして夫の愛情を奪つてしまふ恋仇の女性を探し出すのに多くの努力を払うのかと訊ねたのだった」というふうな記述にも認められることである。前述したように、カシヨンは箱館赴任の翌年にホチソンと同行してアイヌ集落を探訪してゐるわけで、直接アイヌと接触したことはそれからもあきらかである。そのとき、ホチソン一行は二泊三日の旅をしてゐた。前掲の書簡には、つきのような記述がみられる。

On the 28th we retraced our steps. On the 29th, at the top of the lake, or rather the mountains which surrounded it, I received "in a large cigar-box," a little note from my wife, saying that Captain Colville, H. M. S. "Camilla," had arrived."

だが、じつはこの文章の前に「二十八日に私たちは前進して、同じ民族に会つたが、役人のほかには日本人とは会わなかつた」(On the 28th we proceeded onwards, meeting the same race of people, but no Japanese, except officials.)とある。このコマがら、カシヨンのアイヌ集落滞在は少くとも二十七日から二十八日に

かけて一泊三日、あるいは二十八日にはべつの集落にも泊り、結局二泊三日の間、アイヌとの接触もあったことが考えられるのである。ホヰンやカシオンが探訪した集落については、残念ながら「箱館から約二十マイル」としか記されていない。

さて、カシオンの著書『アイノ』は概要約説によると、じぎの五十四項目から成立している。

種族——彼らはだったん人系である——性質の差異——その宗教  
——その住居——室内裝飾——家具——食糧——素朴な料理——衣服——婦人の衣服——刺青——刺青の意味——その起源——婦人の醜さ——ルーシユアン人における刺青の起原——一夫多妻制——アイノ婦人の名声——この問題の一逸話——結婚のとりきめかた——誓い——婚礼の式——女性の貞節への試み——母性愛——出産——認知された母親の妊娠——この場合の祝福と念願——学校と文学の欠如——伝誦——天来の詩人——この問題の一逸話——アイノの起原——この問題に関する日本人の見解——アイノの言語——葬式——流涕機械——訴訟の手段——毒——この毒の危険性——狩猟——熊狩り——漁撈——漁の準備のしかた——蝦夷島は魚の宝庫——コブ・アワビ——ロトシエ（小さい海豹のこと）——毛皮——踊り——熊の供儀と崇拜——その誕生——その訓練——熊に捧げられる演説——乳母の涙——祭壇

アイヌ民族はサハリン、カムチャッカ、千島の土着民であり、だったん人、日本人、朝鮮人、中国人とは別の民族であるが、だったん人の血統をひいているようにみられると、カシオンはまず述べて

いる。身体的特徴、風俗、習慣の相違にもかかわらず、大変顕著な類似した方言、しきたりがあるので、だったん民族にアイヌ民族が結びつくものであるとも述べ、じぎのように説明している。

Les traits physiques de ces tribus se ressemblent assez. Toutes se distinguent par leur teint cuivré, leur peau rude, ridée et couverte de poils, par un système osseux très-préminent, par une irrégularité profonde dans leurs formes, etc, etc.

だったん人とアイヌはかなり似ている。赤銅色の顔色、ざらざらでしわくちゃで、毛で覆われた皮膚、大変突起している骨質の体格と外見の不揃いなどが目立つ点である。

両民族は身体的には類似しているが、精神的特徴はそれほど一様ではない。蝦夷の土着民すなわちアイノは率直、誠実である。愛の特徴はだったん人よりは狡猾で残忍である。その知性は生来ほとんど開発されておらず、文明と同程度に進んでいない。カシオンのアイヌ民族の評価はきわめてきびしいものであるが、この場合、べつに具体的な説明はなにひとつない。

宗教は熊を崇拜するものである。熊は疑いもなく神である。海、山、大河、火山、すなわち水、火、大地、空気を支配する精たちはやはり特別な崇拜を受けるのである。

アイヌの住居よりも質素、というよりむしろ貧弱でみすぼらしいものはあるまい。アイヌの家屋はなんにでも役に立つ唯一つの部屋からつくられている。枝をおろされているけれど未加工の藁や藁が

この原始的家屋の建築材料である。金持ちや偉い人の家では土間に莫庵が敷かれている。煙は唯一の抜け穴、つまり入口から出る。入口の傍には普通小さな明りとりがある。これは竈かまどの精、熊や先祖の霊の出入に使われる窓と呼ばれるものである。猫や犬がときには神聖をけがすが、神聖な場所である。

家屋の藁製の壁には台所道具、すなわち鍋、木製の大きじ、壺、漆塗りの器などがぶるさがっている。また、弓矢、斧、刀剣、網、櫓かき、槍などが掛けられている。

料理は非常に質素で単純である。煮魚か生まの魚、熊の肉、海草、若干の木の根っこ、ミキ(根っこのエキス)の入った酒、ときには米飯、こういうものをアイヌは好んで食べるのだ。

衣服は男女とも同一である。背中に青い模様の入った黄色の粗末な布でつくられた衣服で、同じ布の帯をしめている。少々暮しが楽で贅沢をしようとする婦人は衣服の下に日本人やロシア人や中国人から買ったそれほどかたくなくない綿製品をつけている。女性は衣服を左から右に前を合わせているが、男性はその逆である。女性の頭は特別に伸ばし、毛髪はナザレト人ふうにわけている。耳には彩色の貝殻やガラス玉をつけ、唇と口のまわりと歯は青黒い入れ墨をしている。女性の刺青は一般的な風習で、既婚婦人の貞節を表わす。

カシオンは、ここでさらに「日本女性は歯だけを入れ墨している」と説明しているところをみると、いわゆるお歯黒をも入れ墨とみなしているようである。

アイヌによると、この風習を最初にもたらしたのは女神である。この女神は非常に美しく、うっとりするばかりの唇をもった口をしていた。神たちはこの女神を争った。女神はその追跡から逃れるた

めにおぞましい化粧をすることに訴えたが、これがアイヌ女性の一つの掟となった。

アイヌでは一夫多妻が許されている。アイヌ女性にとつての栄光と最高の徳はその夫のめかけを探すことである。その婦人は嫉妬をもたないという評判をもつのである。この問題についてカシオンはある日、アイヌの女性にどうして夫の愛情を奪ってしまう恋仇きの女性を探し出すのに多くの努力を払うのかと訊ね、アイヌ女性にも嫉妬心があることを確認している。

アイヌの女性は夫の選択の自由をもたない。まだ母親の胸に抱かれている頃に婚約させられてしまう。カシオンはこのあと婚約の過程を述べている。それによると、二人の母親がわが子をカッブルにして、結婚話をまとめてしまう。十五、六歳で、仲人は最後のとりきめをする。両者が合意し、贈物が両親の間で交換されると仲介者は静かだが暗い夜をえらび、婚約者を未来の夫の家にそつと案内する。未来の夫はそのとき両親や友人と竈の傍に坐っており、結婚以外の話をしている。仲人は自分のうしろに娘を隠して入ってくる。主人側の人びとは軽く会釈し、婚約者には気づかないようにする。

おしやべりは相変らず続いている。場所はあらかじめ整えられていて、まだ点火されていない燈明が部屋いっぱい置かれている。竈の炎だけがその場を明るくしている。みんなは仲人のことをほとんど忘れている。仲人はだれひとり眺めていない婚約者をひとり残して退場する。数分後、婚約者はそつと立ち上り、燈明をつける。これが祝宴の合図であった。ミキの痛飲、踊り、歌が始まる。

カシオンはアイヌの女性が夫にすこぶる貞節であることを紹介している。もし夫が妻を疑う場合、その疑いを解く手段をもつてい



る。深い鍋で湯を煮えたぎらせ、その中に小石を投げ入れ、疑いをかけた妻にひとつずつ沸騰している湯からとり出させる。そのとき彼女の腕が湯につかなければ、彼女の無実が証明されるが、逆に湯が皮膚を傷つけたら、不幸な女は追放か死に処せられてしまう。

アイヌの母親の愛情は日本人の場合より深い。子どもを愛し、離れない。いつも背負っている。子どもが生まれ、産湯をつかうや否や、小さな魚を食べさせ、熊の毛皮の精に捧げられる。

アイヌには文学も文字もない。その歴史、祭礼、信仰はすべて口承に委ねられている。唯ひとりの聖職者、歴史家、教師、学者、それは詩人である。詩人だけが天から靈感を受けた人であり、アイヌ民族と英雄の栄光を知っているのである。彼だけが神聖と俗事に関して教え、説くことができる。歴史のさまざまな事実、アイヌが関心を寄せられるさまざまな事柄に関する詩、民謡、歌謡をつくる。カシオンは親しいアイヌにその先祖、つまりアイヌの起原についての質問をしている。その家の主人はつぎの伝説を語るのだった。

熊だけが私たちの森をさまよひ、魚が岸に来て眠っていた頃、南にひとりの神（日本の帝）がいた。この神は眼が太陽や月よりも美しかった女神と結婚していた。彼女は不貞の女であった……。死んで天に帰ることが彼女を待つ運命だった。神は愛するがゆえに寛大であった。女神を小舟に乗せて海に流すと、海の神々は松前の近くに漂着させた。悲しみ、涙を流して、女神は川のほとりの深い谷間の洞穴に姿を隠した。彼女は死にたくなかった。眼を閉じた。と、突然、小さな物音が清い静寂のうちに響いた。女神は驚き、眼を開けると、可愛い犬が泳いでくるのに気がついた。犬は口の片端に果

実、もう一方の端に花をくわえていて、女神にそれを差し出すのだった。女神は花をつかみ、果実を食べた。おいしかった。犬はそつと遠ざかり、べつの果実を持って戻って来た。このようにして犬は毎日女神に食物を運んだ。ときには魚、またのときには蜜蜂を……。女神の心に安らぎが生まれ、唇に歌が上った。女神はその犬を愛し、やがては結婚し、間もなく最初のアイヌが生れた。

カシオンはアイヌの生活様式、習俗、習慣のうち、たとえはアイヌが坐る場所を決める前に、犬のようにくるくる回ることやその鼻が犬のそれに似ていることを、あたかもこの伝説を肯定するためであるかのように紹介している。たとえこの話が滑稽であるとはいえ、これは日本人の間では通説になっている話であり、疑いの余地もないと、このアイヌ起原説をカシオンは信用しているが、金田一京助も『アイヌの研究』で「昔やんごとなき上臈が罪を得て流されて蝦夷に漂着し、偶々牡犬に養はれ、遂に婚して其間に生れたものが、この地の始祖である。故に合の子の意味にてアイノと云ふ」というアイヌ起原説の一つとして同じ説を紹介していることを指摘しておきたい。

アイヌの言語は単純で平易であるが、アルファベットをもたない。貧弱で、きわめて比喩に富んでいる。海、火山、熊、鹿などから頻繁にたとえを借用している。したがって、たとえば「熊の精神と力が汝とともに在れ！」——これが挨拶である。

死者が家庭に出るとき、大きな悲運である。家を焼いてしまわなくてはならない。家とともに家に入った死者の霊をも焼かなくてはならないのである。家族全部、親戚全部が七日ないし八日間仕事を

休み、泣かなくてはならない。八日目は葬儀の日だが、一日泣き、悲嘆の叫びをあげる。

男たちは腰まで素裸で、木製の槌で装備し悲嘆に興奮している。その槌で隣人を打つと、そのお返しを急いでやる。その打ち合いは葬送の行列が墓地に到着するまで続く。

この槌は涙の大事な道具であるが、一方、訴訟や議論を裁く道具でもある。紛争が二人の人物の間にもちあがると、友人たちの会議が招集される。もし問題が重大な場合、会衆は槌だけが困難を切りぬけられるものと決める。それゆえ、一定の日に、二人の抗争者は友人たちと河岸に赴く。めいめいが精霊や海の龍に祈りを捧げ、ただちに決闘を始める。二人の決闘者は裸であり、最初に打ちさえる者を決めるためにくじをひく。運命が宣告されると、刑を執行されるようとしている者は敵に背を向ける。敵はあらかじめ取りきめられた数だけなぐりつける。血がほとばしり出る。ついに最後の殴打が終わる。苦痛は犠牲者を激怒させた。恐ろしい叫びをあげて立ち上る。死闘は続く。両者が力尽きるか、一方が降参し謝まらぬか、あるいは立会人が止めさせないかぎり、いつまでも続く。このような決闘がアイヌにはよくみられる。

大変侮辱されたアイヌが決闘を拒んだり、決闘中にあまりにも早く苦痛に屈したりすると、ブースーという毒薬で死刑にされる。この薬の成分は秘密で、征服者にも決してこれを明かさない。この毒は弓矢にも塗られ、かなり長い間激痛をもたらすのである。

蝦夷の森に入り込む旅人にもおそろしい敵がある。旅人はアイヌが熊や狐や鹿をとるために準備したわなにはまりこむ。普通、このわなは森の入口に張られている長い綱で、これに触れると、毒矢が

飛んでくる仕掛になっている。狩の方法はこれ以外にもある。アイヌは一年のうち七カ月は狩猟に、あとの五カ月を漁にあてている。

武器は槍、弓、斧、短刀である。狩猟はアイヌにとってたんに名譽をあたえてくれるものだけにはとどまらない。熊の皮、胆汁などは貴重な財源となる。アイヌの女性は狩にはそれほど情熱を燃やさないが、たまに熊と力くらべをしたりする。アイヌが狩に従事していないときは前述のように漁に出る。五月か六月に始まるのだ。

アイヌは農耕には携わりたがらない。軽蔑するのだ。日本人から衣服、タバコ、米、酒などを受けとっている。アイヌは全注意力と術策を漁に向けている。小舟を造り、網や網具を樹皮でつくる。

蝦夷の海は魚が多い。季節ごとに魚がいる。鮭は二月、三月に北西からやってくる。鯛は四月、鯧は五月、鱈と大きな鱈は七月、八月、コウイカは秋だ。乾燥し包装した魚は日本人に売られるが、衣服、米、たばこなどと交換される。魚油はヨーロッパ人に売られる。海藻類、つまり昆布も大きな財源で、中国むけの主要輸出品である。イリコやアワビは中国人が大変気に入られている。

ロトシユ、つまり一種の小さい海豹アザラシは特記するに価する。稀有であり、途方もない値段で売られている。中国人や日本人が最高の疲労回復薬としているものである。

毛皮もまた資源である。熊や鹿の皮のほかに、狐や貂や海狸(ビーバー)などの皮はロシアと日本の間の重要な通商の品である。

歌や踊りはアイヌの喜怒哀楽の感情を示す表現である。アイヌのことわざには「歌ったり、踊ったりしたことのない人間は生きたことのない人間である」というのである。

アイヌの祭では熊の供儀と崇拜が大きな特徴となっている。詩人

は熊の誕生を予言することができる。

ある日、アイヌは大ニュースを知る、つまり祝福された熊がみつかったと。アイヌは神託が予言したことをすべて集める。養父の名が口々に云われる。古老の勧告は授乳を告げている。一般には一番豊かで美しい女性がその母乳で毛むくじャらの養い児を養うという使命を受け入れる。決して母親は自分の子どもを大事にしないのである。幸福な熊の子は母親の愛撫と不断の世話のうちに成長する。やがて、熊の本能が発達し、アイヌの一番高貴な女性の母乳にもかかわらず、檻が必要となる。二歳である。大きく肥えている。肉や魚をむざぼり食べる。とうとう、その日がやってくる。隣人たちが集められる。詩人が相談を受ける。熊祭りが始まる。古老たちは一番美しい服装をまとい、養母以外の女たちすべてはいけにえの熊を取囲む。大酋長は、一瞬の苦痛にたえれば熊は全能の神々に列せられるが、それはアイヌの名誉と祝福のためのものであるということ演説する。演説が終ると、檻はきちっとした柵で四方を閉ざされた方形の広場に運びこまれる。そこには妊婦以外のアイヌがすべて手に張りつめた弓を持ち、やっと呼吸している。乳母のつんざくばかりの叫び声が深い沈黙を揺さぶる。ついに檻が開かれる。熊はとび出す。弓矢があられのように熊に落ちてくる。供儀は終る。矢はすべて集められて熊に捧げられる。

詩人は新しい神の名を宣言する。その演説が終ると聴衆は平伏し、熊に不作法と手荒なことをしたことをわびる。最長老の者が熊の死の直接の原因である矢への復讐として矢を焼いてしまうようにつけ加える。聴衆はたぐさんのたぎぎに火をつけ、一瞬のうちに矢と檻を焼いてしまう。間もなく祭りは賑やかになり、料理や酒や

壺や花などが続々と神である熊に捧げられる。歌、踊、詩人の演説が順々にこの祭典を活気づける。ただひとりの人物が泣いて、群衆のこの陶酔ぶりを厭っているふうである。それは乳母だ。彼女はみずからの養い子(熊)の剝製の毛皮の前でひれ伏したまま、果しなく悲嘆にくれている。やがてミキがほとんど無くなり、みんなが疲れてしまおうと、剝製となった熊は露天の祭壇に運ばれる。頭は行列で運ばれ、乳母の家の前の杭か柱にぶらさげられる。そこで新しい神(熊)がその恩恵をあたえるものとみなされている。また、そこで新しい神がその崇拜者たちから敬意と願いを受けるのである。

神聖な場所は花飾りのある、螺旋状の白い木の小さな切れはしに認められる。この神聖な棒の下の方に磨がれた石かあるいは大きな貝がある。そこには鏡と見まがうばかりに似たものがあり、白い紙製の花飾りがある。これらは日本の原始的な神々、カミの寺院、すなわちミヤ(宮)の飾りである。この花飾りと鏡は清浄さと廉直さの象徴であるが、今日のアイヌの宗教の象徴である。

アイヌ民族は南西から北東へ、北緯四十二度三十分から五十六度にかけての地域に住み、海辺にだけ居住する。内陸は熊や狼などが住む未踏の森林でおおわれている。南部は日本人が住み、若干の都会、箱館、松前、江差などがある。この地域は日本の初代將軍ヨリトモ(源頼朝)の弟(義経のことか)が攻略したところだが、長いこと小大名たちの戦さの場となった。今日、蝦夷はすっかり日本に服属し、一八五八年以来外国に開港している箱館にある奉行が統治している。だが、大君は松前藩主に蝦夷の一部をあたえた。大君はこの蝦夷を準備させるために日本の北部(奥羽)の七大名に大部分の土地を分割した。日本人はロシアの侵攻を恐れ、防備体制を敷

いている。これは日本人の愛国心の称讃すべき努力である。

カシヨンはこのように説明したあと注目すべき発言をしている。

私たちはこの島がロシアがそう望むとすぐさまロシアに属してしまふだろうということを認めなくてはならない。本当云え、時機はまだ熟していない。日本政府は、毎年道路を開き、運河を掘り、もともと肥沃である土地を開墾し、森林を育て、公共施設を建てたりするために数百万フランを支出している。——ロシアは時期を待つて手に入れるしかないだろう。

当時の日本が置かれた国際的状况、とくにロシアの南下政策を箱館に滞在したカシヨンの眼は的確に捉えていたのである。カシヨンは北海道が鉛、石炭、硫黄、銅、鉄、錫などの資源にみちた土地であることを指摘したあと、つぎの文章で『アイノ』の筆を擱いている。

蝦夷の都、箱館はロシア公使館の所在地であり、その海軍の冬期碇泊港である。——マンシユウ（現在の中国東北地方）の諸港の寒気に追われたロシアのすべての建物が箱館に逃避しにやって来ており、そこに確実な碇泊と必要な物資を見出しているのである。

カシヨンはその箱館滞在中に病院建設の計画をたてたが、ロシア正教の布教活動の一端としてロシア人が大病院を建ててしまい、挫折に終るといふ苦い経験をもっているというように、必ずしもロシアに対して好意をもっていなかったことが考えられる。『アイノ』の末尾をロシアに関する記述で飾っているところで、カシヨンの

のロシア感情を見出すことができると興味深い。

カシヨンがこのアイヌに関する書物をホヂソンとのわずか一度だけアイヌ集落探訪で書きあげたとは考えにくいほど、叙述は綿密かつ詳細をきわめている。西洋人の先行著作を参照して書いたと考へるにはいかにもカシヨンの見聞の跡が濃厚に認められるのである（紙数の都合上、残念ながら先行著作のアイヌに関する考察との比較検討を割愛しなくてはならない）。結局、カシヨンはホヂソンとのアイヌ探訪を踏まえ、箱館滞在中の見聞を参考にして、この『アイノ』を書いたとみてよいのではないだろうか。本稿では、カシヨンの『アイノ』の紹介の概要を伝えることにとどめ、これについての具体的な検討はつぎに譲りたい。

〔文中敬称略〕（一九七九・一・六）

〔引用及び参考文献〕

式場隆三郎編「アイヌ書誌」（『工藝』百十号 日本民藝協會 昭和十七年二月）

アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』（第一法規出版 株式会社 昭和四十五年四月）

越崎宗一『外人の見たえぞ地』（北海道出版企画センター 昭和五十一年九月）

C. Pemberton Hodgson: A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-60. with an account of Japan generally.

1806. Richard Bentley.

Mernet de Cachon: Les Aïnos, origine, langue, moeurs, religion. 1863. Mesnel.